
～SAIKANO～もう一つの物語

緋炎

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

～SAIKANO～もう一つの物語

【Nコード】

N5588A

【作者名】

緋炎

【あらすじ】

原作とは別の世界、最終兵器にならないちせと戦争のない世界のお話です。

『アケミの誕生日』

10月7日土曜日、今日はチセとデートだ。僕は約束の時間よりも30分早く待ち合わせ場所に行った。

チセと付き合ってから1ヶ月が経った。特に何もなく（チセが授業中に、恐い夢を見て騒ぎ出した事を除けば）至って平和だ。

嬉しい事に、テレビが見れるようになり、携帯電話も使えるようになった。週刊誌は毎週発売されるようになった。

チセを待つこと30分、約束の時間になったがチセは…来ない。

「ピリリリリリ！ピリリリリリ！」

携帯が鳴った、チセだ。

「もしもし？」

『あ、シュウちゃん？ごめんね？今…交番なんだわ…』

「…はあ？交番？」

『うん…だから、その…ごめんね？迎えにきてほしいんだわ…ごめんね？』

僕は全速力で交番へ向かった。

「ちせ！」

「あ！シュウちゃん！」

チセが僕に抱きついてくる。

「どうしたチセ？何があった？」

「あの…サ…」

「サ？」

「……サイフ落としちゃって…」

一気に脱力…

「なんだ…てっきり万引きでもしたのかと…」

「ひどい！そんな事しないよお！」

「冗談だよ、で？サイフはあったのか？」

「うん！それが凄いなんだよ？中身が増えてるの！」

チセが目を輝かせている。まるで初めてマジックを見た子供のようにだ。

「家を出るときは三千円しか入ってなかったのに、さっき見たら一万二千円も入ってたの！凄いでしょ？」

「あ、ああ、凄いな…そりゃあ…」

僕は絶対にチセの見間違いだと思った。

「じゃあ、はやく行こうぜ？買い物。」

「うん！」

「うーん…どっちがいいかな？ねえシュウちゃん？」

「あん？」

「この服とあの服、どっちが似合うかな？」

「ああ…ん？どっちもチセにはでかいんじゃないか？（胸もなまらちっこいんだし）」

「違うよシュウちゃん！これはアケミへのプレゼントだよ！」

「アケミにプレゼント？なんで？」

「シュウちゃん、そろそろアケミの誕生日だよ？誕生日はプレゼントをあげるもんでしょや。」

「…忘れてた。オレも何か買うか…」

辺りを見回した僕の目に、最初に写った物は…出目金の貯金箱だった。

「アケミ…怒ると思うよ？」

「…だよな？」

次に目に入ったのは、ブラジャーだ。

「…シュウちゃんのエッチ。」

「ア、アホ！そんなじゃねえよ！」

次に見つけたのは、蝶のイヤリングだ。

「アケミにイヤリング…」

「ん…微妙だ…」

「無いなあこれってもんが…」

「シュウちゃんシュウちゃん！これは？」

「…え？イヤリングと似たようなもんだべや…」

「ダメ？」

「うん…いや、結構似合うんじゃないか？アケミに。」

「じゃあこれにしようよ！」

「そうだな、これにすっか。」

僕は二人で一つの物を買った。何を買ったかは、アケミに渡すまで秘密だ。

〃数日後〃

「「「アケミ！お誕生日おめでと〜〜！」」」

昼休み、屋上でアケミの誕生日会を開いた。

「ありがとね！まあ、お誕生日って歳でもないけど、嬉しいよ。」

アケミは照れ笑いしている。凄く嬉しそうだ。

「はい！プレゼント〜（笑）」

みんなのアケミへのプレゼントは、口紅に香水、ぬいぐるみが3つ

（BY男）だった。そして：

「はい、アケミ。私とシュウちゃんから！」

チセは小さな袋を手渡した。

「ありがと、チセ、シュウジ。開けていい？」

「うん！」

「期待はすんなよ？」

アケミは袋を開けた。

「あ…」

中から出てきたのは、青い石のついたネックレスだった。

「アケミに似合うと思って…付けてあげる！」

チセはアケミの首にネックレスを付けた。

「おお！似合うぞ、アケミ！」

「可愛いよ、アケミ！」

「その辺の男なんかイチコロよ！」（笑）

「うわ！眩しすぎて死ぬ〜」（笑）

「やめてよ恥ずかしい…」

アケミは顔が真っ赤だが、満更でもなさそうだ。

「チセ、ありがとね？」

「いいよお！お礼なんて（照）」

「あ！なあ、そういえばこの石ってどんな意味があるんだ？」

アツシがチセにきいてきた。

「えへへ！秘密だよ〜（笑）」

「シュウジ、知ってんだろ？教えろよ〜！」

「やなこった！まあ、アケミにはあとでこっそり教えてやるよ。」

「シュウちゃん！だ、ダメだよ教えちゃ！恥ずかしいよ〜！」

この世界は平和だ。世界の全てが平和かはわからないが、少なくとも僕の周りは平和だ。平和で、幸せだ。

〜放課後〜

「ねえシュウジ？」

「あ？」

「あのネックレスの石の意味って…何？」

「ああ、あれか…あれはな？…」

僕はアケミの耳もとでそっと囁いた。

（大切な友達）

E
N
D

『お受験うお〜ず』(前書き)

〽SAIKANO〽もう一つの物語『アケミの誕生日』の続編です。

『お受験うお〜ず』

「ねえ、シュウちゃん…」

「ん？なんだ、チセ？」

「あの…シュウちゃんは、どこの大学行くの？」

「大学か…実はまだ決めてないんだ、大学。」

「そっそうなんだ…」

「チセは？」

「ふえ！？何？」

「いや、大学の話してたべや…チセはどこの大学受けるんだ？」

「わ、私は…」

チセの顔が真っ赤だ。

「…シュ…」

「…？」

「あの…シュウちゃんと…同じ大学に行きたいなあ…なんて（照）」

「同じ大学か…」

「で、でも無理だよ！シュウちゃん、頭良いし、私は頭悪いし…」

「いや、でもオレもチセと同じ大学行きたいし…」

「ホント！？」

チセは目を丸くして驚き、喜んでいる。

「当たり前だべ？オレだって、チセと一緒にいたいし…」

話してる僕の顔は、きつと真っ赤だ。

「じゃあ私、頑張って勉強するね！中間テストも近いし、シュウちゃんぐらい頭良くならないと…」

「無理するなよ？」

「ありがと、シュウちゃん…」

しかし…中間テストの結果は…

現代文56点

古典61点

数学47点

英語74点

理科39点

社会98点

リスニング68点

「…いいような…悪いような…」

微妙だ…

「やっぱり無理なのかな…ごめんね？シュウちゃん…」

チセはこの上なく落ち込んでしまった。こうなったら…

「…よし、チセ！」

「きゃ！…どうしたの？シュウちゃん？」

「オレが勉強教えてやる！」

「え！？でも…悪いよ、そんな…」

「気にすんなって、オレがチセに何かしたいんだ。」

「…迷惑じゃない？」

「ないない、喜んで教えてやるよ。」

「じゃあ…お願いします。」

こうして僕は、チセに勉強を教える事になった。

数ヶ月後…

「…67…6…あ……あった！シュウちゃん、番号あった！受かったよ、私！」

「…落ちた。」

「…え？シュウちゃん？」

「オレの番号がない…」

僕の番号は99番、でも…

「96…97…98……100…」

無い…

「ごめんチセ…オレ…」

「シュウちゃん？シュウちゃんは99番じゃないよ？」

「…は？」

「だって私、67番だもん…テストの時、シュウちゃん私の前に座ってたっしょや！」

「あ…」

そうだ！僕とチセの番号がこんなに離れてるわけがないじゃないか！

「じゃあオレの番号は、99じゃなくて…」

「66番だよ！」

66番は…

「シュウちゃん！ちゃんとあるよ！シュウちゃんも受かってるよ！」
「…」

僕はその場にドサツと座りこんだ。

「シュウちゃん？どしたの！」

「…び…」

「び？」

「びっくりした…」

「…ぷ、…くっくくく…あははははは！！！」

チセが笑いだした。

「わ、笑うなよ！仕方ねえべや！ホントに二次の面接で落ちたと思っただからよ！」

「だ、だって…ふふ、し、シュウちゃんが…『び、びっくりした…』って…ごめんなさい…シュウちゃん可愛い…！」

チセは笑い続ける、僕も笑ってしまう…我ながら、99と66を間違えるなんて…チセの前で恥ずかしい…

「でもよかったな、二人とも受かって。」

「うん、本当に…シュウちゃんのおかげだね！ありがと、シュウちゃん！」

「アホ！チセが頑張ったからだろ？もっと胸はれよ、チセの実力だ！」

「うん…これでずっと一緒だね！シユウちゃん！」

「ああ、ずっと一緒だ。」

僕ら二人は一緒の大学に入れた。これが僕らの最初の壁だったのかもしれない。でも、これからどんな事があっても、二人で乗り越えられる…受験を通じて、僕はそう思った。

く帰り道く

「『び、びっくりした…』…くふ…ふふふふふ…」

「チセ！もうやめろって！」

「だって…ふふ…ははははははは！」

チセは家に着くまで言い続けた…

END

『僕と彼女は隣さん』 (前書き)

〽SAIKANO〽もう一つの物語 『お受験うおくず』の続編です。

『僕と彼女はお隣さん』

僕とチセは札幌の大学に入った。家から遠いので、僕はアパートを借りた。

本当はチセと同棲したかったんだが、「私のお父さん、わりと古い人だから…」と、どっかで聞いたようなセリフで、チセに同棲はダメだと言われた。

だけどチセも近くにアパートを借りたらしい。が、場所はまだ知らない。

「よ…っと、大体片付いたな。」

引越しを終えた僕は、自宅から持ってきた小物をダンボールから出したりしていた。

「あ、そうだ…母ちゃんがお隣さんに挨拶しろって言ってたな…」
僕はドーナツを持ってお隣へ向かった。

ピンポン

「はーい！」

女の人らしい…あれ？どっかで聞いた声な気が…

「はい？」

「あ、あの…隣に引越してきた……。」

「…」

「…」

「ち…」

「し…」

「チセ!？」

「シュウちゃん?!」

「なんで隣なんだよ…」

ここは僕の家。チセも引越してきたばかりらしく、とりあえずチセの家よりは片付いているので、うちに来た。

「びっくりだね…」

「ああ、びっくりだ…」

僕らの間はぎこちない…付き合い始めたばかりの頃のようなぎこちなさだ。

「なんか…同棲してるみたいだな？」

「う…うん…」

ダメだ…会話がもたない…とりあえずチセに持っていったドーナツを食べてみる。

「チセも食えよ、うまいぞ?」

「うん…」

ダメか…

どうする？どうするんだ…オレ！

「な…なあチセ？」

「え？あ…なに？シュウちゃん…」

「夕飯とかどうするつもりだった？」

「夕飯？」

「ああ、冷蔵庫の中とか空だろ？オレは蕎麦でも取ろうかと思って
ただけど…一緒に食べないか？」

「うん！食べる♪」

「よし、じゃあ先にチセの家の片付けやっとくべ！」

「うん！」

よし！なんとか持ち堪えたぞ…よくやった…オレ！

僕らが立ち上がると…

ピンポーン

「シュウちゃん、お客さんだよ？」

「いや…チセの方だろ、これ。」

チセの家の前には、アケミが立っていた。

「アケミ！」

「あれ？チセ…やば！間違えて隣の家ピンポンしちゃった…」

「ううん、私んちはそっちであってるよ？」

「じゃあ…そっちは？」

「オレんちだよ…」

アケミは哑然としている。

「あんた達、同棲ができないからって隣どうしに…」

「違う！」

「違うよ！」

僕らは声を揃えて反論した…すると…

「よおシュウジ！あれ？チセちゃん…アケミも！？」

アツシがやって来た。

「おお、アツシ…早かったな？」

「ああ、まあ…でもチセちゃんとはともかく、なんでアケミが…」

「あたしはチセの家に引越しを手伝いに来たの、そしたらチセんちの隣がシュウジんちだったの！」

アツシは哑然としている。

「シュウジ、同棲ができないからって隣どうしに…」

「違う！」

「違うよ！」

僕らはまた、声を揃えて反論した。

「偶然…ねえ？」

また僕の家だ。アケミが目を細めて僕らを見ている。

「偶然にしては出来すぎじゃない？」

「全部シュウジの策略とか！」

「あるある！」

「無えよ！バカ！」

ここで一段落…

「まあ、とりあえず…チセ、夕飯は？」

「あ、夕飯は蕎麦でも取ろうかってシュウちゃんが。」

「じゃあシュウジ、蕎麦追加2人前で！」

「お前ら夕飯食ってくのか！？」

「何よ？引越しの手伝いするんだから、夕飯ぐらいおごりなさいよ！」

「おごりかよ！割り勘じゃ…」

「さてと、じゃあチセの部屋の片付けしに行くか！」

「おい！人の話を…」

「オレも手伝うよ、速く行こうぜ！」

「アツシてめ…逃げんな！…」

「ほら！行くよ、チセ！」

「あ、ちよっ…アケミ押さないで…」

ボタン

3人は出ていってしまった…残された僕は…

「…」

「はい！鉄龍札幌支店です！」

「あの、ざる蕎麦4枚お願いします…」

END

『光輝く未来へ』（前書き）

く S A I K A N O く もう一つの物語『僕と彼女はお隣さん』の続きです。

前回のあらすじ：

札幌に引越してきたオレ、お隣さんに挨拶に行くと…なんと！そこに住んでいたのはオレの彼女のチセだった！

…：しかしまあ、そんな事はすぐに親にばれるもので、一週間後にはチセの親父さんが乗り込んできて大騒ぎだった…でも、なんとか説得することができ、僕とチセの半同棲生活は続いている。

『光輝く未来へ』

「シュウちゃん起きて、朝ごはん出来たよ?」

「ん…ああ…」

僕は目を擦りながら布団から出た。

「おはよ、チセ…」

「おはようシュウちゃん♪」

朝飯は、夕飯の残りのキムチ鍋だ。

「いただきます。」

「いただきます。」

僕はキムチ鍋を一口食べ…危うく吐きそうになった…

「甘!こ、いや、え?チセ!」

「ごめんなさい!…多分、キムチ鍋の元とメープルシロップを…」

「…マジか?」

「…ごめんなさい…」

なんとかメープル鍋を平らげ、僕らは大学へ出かけた。

「シュウちゃん、大丈夫?」

チセが心配そうに僕を見ている。

「ああ、大丈夫だ…全然平気…」

そんなわけが無い…

「ごめんね？ シュウちゃん、私が…」

「大丈夫だって、心配すんな…ただ…」

「？」

「夕飯は美味いもん作ってくれよ？」

「うん！ まかせて！」

チセが張り切ってる…

チセの料理は美味い。まあ、たまに今朝みたいな失敗はあるが…8
割方は美味い！ 夕飯が楽しみだ…

その夜

「…」

僕は啞然とした。テーブルの上には、ビーフシチューにバターロール、ポテトサラダにシャンパン…

「どう？ シュウちゃん♪ 凄いでしょ！」

「…凄い…てか、凄すぎ…みたいな…」

「シュウちゃんったら、ほめすぎだよ」（照）

ほめたつもりは無いけど、チセは満更でもなさそうだ。

「早く食べよ！冷めちゃうよ？」

「ああ…食べよっか。」

「いただきます。」

「ねえシュウちゃん？今日は何の日か覚えてる？」

夕飯の後、チセが僕に問いかけた。

「今日？今日は…9月8日…？わかんね…」

「今日はね？シュウちゃんと初めてキスした日だよ♪」

「ああ！あの展望台で…よく覚えてるな〜チセは。」

「忘れるわけないよ…」

チセが下を向く。まずい…忘れてたから怒ったか？どうしょ…

「だって、シュウちゃんが初めてあたしの前で『僕』って言った日だもん（笑）」

僕の心配をよそに、チセは笑い出した。

「うっせえ！はんかくせえだろ！」

顔が熱い…

「シュウちゃん…」

チセが僕に寄り添ってくる。

「あたし達、ずっと一緒だね？」

「チセ…？」

「ずっと一緒にいたいよ、シュウちゃん…」

チセが抱きついてくる。僕はそれを抱きとめる。ずっと一緒にいたい…僕だってそうだ…チセとずっと一緒に…

「チセ…」

僕はチセを抱きしめたまま、言った。

結婚しよう…

END

未来を生きる僕ら

大学を卒業した年の6月、僕は結婚した。

司会はアケミとアツシ。高校のクラスメートや陸上部の後輩も呼んで、大々的な式になった。

あれから8年：僕は市役所で働いている。本当は教師をやってみたかったんだけど：収入も良いし、定時に帰れるから、無難な公務員を選んだ。

子供は3人、男が一人に女が二人だ。名前はソウタにアカネにリオ。

「ただいま」

僕が帰ると、小2になるソウタが迎えてくれた。

「お帰りお父さん！」

「おう、アカネとリオは？」

「お母さんの手伝いしてるよ、それよりお父さん！お母さんって掛け算九九間違えるんだよ？3×5が24だって…」

「マジか…」

「マジマジ！」

うちの家計簿って合ってるのか？

リビングに入ると、アカネとリオが夕飯を運んでいた。

「お父さんお帰り！」

「パパ〜！」

リオが足にしがみついてくる。ちなみにアカネは6歳、リオは4歳だ。

「ただいま、ちせ？」

台所を見ると、ちせが凄い勢いでキャベツを千切りにしている。

「お帰りシュウちゃん！ごめんね？すぐに夕飯にするから！」

高校時代のあのノロマなちせは…もういない。台所にいるちせは、残像でも見えそうなくらいめまぐるしく作業している。

「お母さんね？さっきまで寝てたんだよ！」

「テーブルによだれ垂らしてね…」

「ソウタ！それは言わないでって言ったのに〜！」

やっぱりちせは変わってないのかもしれないなあ…

こんな感じの日常を送る僕らも、今年で30…三十路ってやつだ。

アケミとアツシも結婚して、アカネと同じ年の息子がいる。名前は…なんだったかな？

親父とお袋も、元気でやってる。

至って平和な毎日だ。

突然だが、僕は最近恋と愛の違いについて考えていたりする。

ああはんかくせえ！

理由？聞かないでくれ…職場の若い女の子との会話の延長では無いぞ？

「恋と愛の違い？」

布団に入った時、ちせに言ってみた。何か答えにつながる事を言ってくれるかもしれないと思ったからだ。

「違いなんか無いっしょや…」

ちせが僕の肩に寄りかかる。

「どっちも相手の事が好きなんだって意味っしょ…好きな方を使えば良いんじゃないかな？」

なんとなく納得出来た気がした。

「わたしは今でも…シュウちゃんに恋してるよ？」

照れ笑いするちせが愛しくて、僕は自分の唇をちせのものに重ねた。

そうだ…僕もちせも、恋しているんだ。

結婚しようが子供が出来ようが、

愛は恋の中に有る。

僕らは、

恋して行く。

END

「でもシュウちゃん、なんで突然そんな事聞くの？」

「え…」

END (笑)

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5588a/>

～SAIKANO～もう一つの物語

2010年10月9日13時49分発行